

異世界の作り方

— 『ハリー・ポッター』と『ライラの冒険』 —

増田 珠子

I

次の一覧は、2003年にBBCが行なった投票数約75万の調査の結果発表された、「イギリス人に最も愛されている本」の上位10作である¹⁾。

- 第一位 J・R・R・トルキーン『指輪物語』(1954-55)
- 第二位 ジェイン・オースティン『高慢と偏見』(1813)
- 第三位 フィリップ・プルマン『ライラの冒険』三部作(1995-2000)
- 第四位 ダグラス・アダムズ『銀河ヒッチハイク・ガイド』(1979)
- 第五位 J・K・ローリング『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2000)
- 第六位 ハーパー・リー『アラバマ物語』(1960)
- 第七位 A・A・ミルン『クマのプーさん』(1926)
- 第八位 ジョージ・オーウェル『一九八四年』(1949)
- 第九位 C・S・ルイス『ライオンと魔女』(1950)
- 第十位 シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847)

文学史の教科書に必ず出てきそうな作品、おそらく誰もが子ども時代に手に取ったであろう定番の物語、絶大な人気を誇る大衆小説、文学賞の受賞作、アカデミー賞を受賞するなど映画化が話題になった小説と、さまざまな作品が入り混じっているが、おおむね長年読みつがれてきたいわゆるロングセラーと言える。出版されてほんの数年しかたっていないのは、第三位の『ライラの冒険』三部作と、第五位で当時『ハリー・ポッター』シリーズの最新刊だった『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』の2作だけである。これらの次に新しい『銀河ヒッチハイク・ガイド』が出版からすでに約四半世紀をへていたことを考えると、この2作の新しさは際立っている。

この2作は、ともにファンタジー作品であり、20世紀から21世紀への変り目の

時期に発表されて、出版当初念頭に置かれた読者である子どものみならず、大人からも大いに注目された作品である。『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』も含む J・K・ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズは、1997年に第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』が発売されて以来、さまざまな言語に翻訳され、また映画化もされて、英語圏のみならず世界中の多くの人々の興味を引きつけている。2005年7月に第6巻『ハリー・ポッターと謎のプリンス』が発売されたときには、世界の各地でニュースとなった²⁾。一方、フィリップ・プルマンによる『ライラの冒険』三部作は、1995年出版の第1巻『黄金の羅針盤』でカーネギー賞とガーディアン賞をダブル受賞し、2000年出版の第3巻『琥珀の望遠鏡』が児童文学としてははじめて、ブッカー賞ではロング・リストに名を連ね、ウィットブレッド賞では大人の文学を押しつけて最優秀賞を受賞した。こちらもまた『ハリー・ポッター』に負けず劣らず大いに話題となったファンタジー作品である。さらに、この2作に関しては、かたや主人公の名字から“Potterian”，かたや作者の名字から“Pullmanian”という言葉も出現している。これもまた両者がいかに注目を集めているかを物語っていると考えられる。

似たような時期に発表され、同じように注目を集め、またどちらもファンタジー作品であるとは言え、この両者が提示する物語世界は一見まったく異なっている。魔法使いの少年が主人公の『ハリー・ポッター』シリーズは、現代のイギリスが舞台で、現実の世界と地続きのどこかにある魔法学校での出来事を中心としている。物語は、魔法界のことを何も知らずに育ったハリーが、ある日突然自分が魔法使いだという事実を知らされるところから始まる。また彼は、やはり魔法使いだった自分の両親がヴォルデモート卿という魔法使いに殺されたこと、そしてなぜか自分だけが生き延びてヴォルデモート卿に打撃を与え、相手は消滅してしまったということを知る。hogwarts魔法魔術学校に入学して魔法の訓練を受けるハリーは、自分を破滅させようとするヴォルデモート卿と何度となく対決し、その復活や復権を阻止しようとすることになる。つまり、『ハリー・ポッター』シリーズの基本的な構図は、善い魔法使いと悪い魔法使いが対立するという単純明快なものであり、いかにヴォルデモート卿とハリーが対決するのかの詳細が、各巻の物語に多様性と複雑さを与えているのである。

一方、『ライラの冒険』三部作では、イギリスに似てはいるものの、現実のイギリスとは明らかに異なる世界を舞台に物語が始まる。この世界では、人はみなダイモンと呼ばれる動物の姿をしたパートナーを持っている。また、ここには鎧をつけ

たクマや魔女も暮らしており、教会が大きな権力を握っている。このような世界で子どもが次々に姿を消すという事件が起こり、主人公の少女ライラは、いなくなった友達のロジャーを探す旅に出る。彼女はやがて自分たちの世界以外にもたくさん世界が存在するのを知り、ロジャー救出に失敗したあとは、教会が忌み嫌うダストと呼ばれるものの正体を探ろうと別世界へわたる。そこでさらに別の世界から来た少年ウィルと出会い、彼が父親を探すのを助けることにする。その後、ロジャーにあやまるために死者の国へ行かなくてはならないと思いつき、実際に死者の国に着くと、そこから死者を解放することを決意する。このようにライラが冒険の目標を次々と変化させていく一方、彼女の冒険は彼女の知らないひとつの大きな使命に向かうものであって、その使命の成否が人々の命を左右するほどのめかされる。そして、ライラがイヴ、つまり誘惑されて墮落し知恵の木の実を口にして原罪を犯した人物の再来であると明かされる。教会は、墮落する前に彼女を抹殺しようと刺客を放つ。一方、彼女の使命達成を願う側は、あらゆる自然の衝動を抑え管理しようという教会と戦い、世界の創造主と自称しているにすぎない天上の権力者オーソリティを滅ぼして、王国のない世界を築こうというアスリエル卿の軍に参加することになる。ライラの冒険とアスリエル卿の戦いは密接なつながりを持つことになるが、大勢の登場人物を巻き込みながらそれぞれ別の場所で独自に進んでいくため、この物語は非常に複雑だという印象を与えることになる。

このように、ふたつの作品は一見、まったく異なる世界を築き上げているようだが、主人公が自分のあずかり知らぬ予言に翻弄されて命の危険にさらされることになるという点、また、主人公が善と悪の戦いの中で善の側が勝利するための鍵を握っているという点で、非常に似通っている。フィリップ・ネルが指摘するとおおり、ライラとハリーはともに「特別」であって、「使命を帯びている」のである³⁾。では、『ハリー・ポッター』と『ライラの冒険』の違いを決定づけるものは何なのだろうか。

II

何が違いを生み出しているのかという点を念頭に、改めて『ハリー・ポッター』シリーズと『ライラの冒険』三部作を並べてみると、どちらの物語にも現実世界と異世界が出てくるが、そのありよう、具体的に言えば、それぞれの作品における異世界と現実世界の関係がまったく異なっているということが見えてくる⁴⁾。今度はこの点に注目して、それぞれの作品を考えてみよう。

そもそも異世界とは、ファンタジー作品に欠かせない存在である。例えば、『指輪物語』において壮大な異世界ミドルアースを生み出したJ・R・R・トルキーンは、ファンタジー文学論である「妖精物語について」の中で、「……物語の作り手は、準創造主となることに成功するのだ。作者は読者の心が入っていけるような第二世界を作る。その中では作者の語ることは『真実』である。つまり、その世界の法則にしたがっているのだ。ゆえに読者は、言わば内側にいるあいだは、それを信じるのである。信じられなくなった瞬間、呪文が解ける。魔法、いや芸術は、失敗に終わる。すると読者は再び外の第一世界に出るのである⁵⁾」と述べている。そして、「思うに、ファンタジーは実はより準創造的なものかもしれない⁶⁾」と語り、「緑色の太陽があると信じられるような第二世界を作り出すためには、十中八九、努力と思考力が必要なはずであり、エルフのわざのような特別な技能が確かに求められるだろう。このような難しい課題に取り組もうという者は、ほとんどいない。しかし、取り組んでみて、いくぶんかでも達成できたときには、めったに見られないような芸術作品が完成するのである。すなわち物語芸術であり、最も重要かつ最も力強い状態で物語を作ることができたのである⁷⁾」と主張している。トルキーンにとって、ファンタジー文学とは、異世界を舞台とする物語に他ならないと言ってよいだろう⁸⁾。ローズマリー・ジャクソンによるファンタジー論でも、「現実を『超越』し、人間の状態から『逃避』し、より優れた別の『第二』世界を構築しているものであると主張されてきた⁹⁾」というファンタジー文学の定義が紹介されている。リチャード・マッシュューズもまた、「ファンタジー文学を正確に定義することは困難であるが、驚異、謎、あるいは魔法——すなわち、私たちが暮らしている、ふつうで、世俗的で、合理的に説明のつく世界を越えられるという感覚——を呼び起こすようなタイプのフィクションであると言え、たいていの批評家は同意してくれる¹⁰⁾」と述べている。確かにファンタジー作品には、何らかのかたちで、読者の日常の世界の範囲を超えた「枠の外」という要素が含まれる。トルキーンの『指輪物語』やアーシュラ・K・ル＝グインの『ゲド戦記』のように、徹底的に「枠の外」を志向して現実世界が登場しない作品、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』のように、現実世界と異世界が別個に独立して存在し、登場人物が両方を行き来することになる作品、P・L・トラヴァーズの『メアリ・ポピンズ』のように、現実世界の日常の暮らしの中に魔法の要素が紛れ込む作品と、規模や程度の差こそあるが、ファンタジーと呼ばれるものには、何らかのかたちで「枠の外」と見なせるものが登場する。そして、どのようなものであるにせよ、「枠の外」を登場人物とともに体験し、そこか

らひるがえって自らの世界に向ける新たな視点を獲得することが、ファンタジーを読むひとつの醍醐味であろう。

では、まず『ハリー・ポッター』シリーズにおける「枠の外」、すなわち異世界とはどのようなものであるのだろうか。

このことに関して重要な示唆を与えてくれるキーワードが、シリーズ第6巻目の『ハリー・ポッターと謎のプリンス』に見いだせる。『ハリー・ポッター』物語において、魔法界のトップは人間界のトップのもとを必要に応じて訪れ、情報を共有しているのだが、この巻の冒頭では、魔法界の首相ファッジが人間界の首相に、ヴォルデモートが復活したことで、自分がその復活劇にまつわる失態ゆえに魔法界の首相の座を追われたことを伝え、新しい魔法界の首相を紹介する。その過程で、人間界の首相がファッジのことを、心の中でひそかに“the *Other Minister*¹¹⁾”と呼んでいると明かされるのである。つまり、同じイギリスという国土を共有している人間界と魔法界は、自己と他者の関係にあると、この人間界の首相は感じているのであり、彼は相手を他者と見なして、人間界と魔法界を区別しているのである。イギリスは、野党が影の内閣を組織し、その党首が影の首相に就任するという国であるが、人間界の首相にとって魔法界の首相は、影の首相よりもはるかに厄介な存在だと言えるだろう。魔法界の首相がもたらす情報は、人間界の首相では決して対処できず、しかも人間界に多大な悪影響を及ぼすような出来事に関するものばかりである。人間界の首相がファッジの訪問を好きになれないというのも無理からぬことである。

魔法界を他者と見なす視線は、首相に特有のものではない。『ハリー・ポッター』シリーズにおける人間の世界は、主にハリーのおばペチュニアとその夫バーノン、息子のダドリーからなるダーズリー一家に代表されているが、彼らが魔法界に投げかけるのもまた、自分たちとは異なる者に対する視線、他者に対する視線と行うことができるだろう。ダーズリー夫妻は「完璧にノーマル¹²⁾」であることが自慢の種という人物であり、ペチュニアの姉が魔女であることを世間の人々からひた隠しにして、自分たちがひきとって育てる羽目に陥った姉の子ハリーをこのうえない厄介者と考えている。魔法や魔法使いを「あのろくでもないもの¹³⁾」と考え「アブノーマル¹⁴⁾」だと思なすダーズリー夫妻と、魔法を使えることこそノーマルだと考える魔法使いたちは、ハリーの扱いをめぐる、ことあるごとに対立することになる。そして、その結果ひどい目に遭うのは、決まってダーズリー一家のほうである。ハリーがダーズリー家に住み、そこを自分の家と呼べるかぎり、ヴォルデモート卿は

ハリーに危害を加えられない。この点で現実世界は異世界の役に立っているのだが、これはそうなるよう魔法がかけられているからであり、ハリーが十七歳になって成人すれば、その防御も有効性を失うことになっている。結局、現実世界と異世界のあいだには、現実世界が悪、異世界が善という明快な構図が成立している。『ハリー・ポッター』シリーズ第1巻の発表は1997年、すなわち、互いに相手を絶対的な悪と見なしていた東西の対立が、1989年のベルリンの壁の崩壊、冷戦終結、そして1991年のソ連崩壊によって解消されたあとである。冷戦から脱したことによって絶対的な善や悪が成立しなくなった結果、何が善で何が悪かがある意味で混迷し、各地で激しい民族紛争が起こっていた世界に対して、非常に分かりやすいかたちで善悪の対立を提示したところに、この作品の人気の秘密の一端を探ることができるかもしれない。そして、ふたつの世界が相容れずに対立するという展開を、世界のすべてを敵か味方かに染め分けようかという勢いのアメリカのジョージ・W・ブッシュ大統領の戦争に重ね合わせるといっても、さほどの外れなことではないだろう。いずれの場合においても、単純な二項対立という誤解の余地のない明白で安定した構図を作り上げることが、人々の支持を集めるうえで有効に働いていると言えるのではないだろうか。

現実世界の現状では、対立の解消への道は極めて険しいと言わざるを得ないが、『ハリー・ポッター』シリーズにおいては、対立するふたつの世界を結ぶ可能性は存在しないのだろうか？ その可能性は、人間の両親のもとに生まれて現実世界で育ちはしたが魔法の能力を持つ人物、物語中の魔法使いの言い方を借れば「マグル」出身の魔法使いに見出されてもおかしくないのだが、マグルの出身者は、ハリーの親友ハーマイオニのようにすぐさま魔法界に順応し、魔法界での成功を何の疑問もなく願い、魔法界のありようをノーマルなこととして受け入れている。例えば、最初に登場したときのハーマイオニの発言は以下のようなものである。

私の家族は誰も魔法の力を持っていないの。[ホグワーツ魔法魔術学校への入学を許可する]手紙を受け取ったときはほんとにすごくびっくりしちゃった。でも、とってもうれしかった。だってほら、いちばんいい魔法学校だって聞いたから。教科書はもちろん全部暗記したわ、それで足りるといいんだけど¹⁵⁾。

一方、ハリー自身はと見てみると、ホグワーツの森番の大男ハグリッドに魔法界のことをはじめて教えてもらったあと、次のように考える。

呪文の本や箒を売っている店は本当にあるのだろうか？ これはみんなダーズリー一家がでっちあげたものすごい冗談じゃないのだろうか？ ダーズリー一家にユーモアのセンスがまったくないことを知らなかったら、ハリーはそう考えたかもしれない。だが、ハグリッドの今までの話は信じがたいことばかりだったのに、なぜかハリーは信用せずにはいられなかった¹⁶⁾。

つまり、彼は何も知らずに人間界で11歳まで育ったものの、たちまちのうちに自分の両親が魔法使いであることを受け入れ、自分にも魔法の能力があることに大喜びしているのである。これは、自分を虐待するダーズリー一家は実はノーマルではなく、自分のほうがノーマルなのだという認識が得られたからに他ならない。

『ハリー・ポッター』シリーズにおいて魔法界と人間界が対立の構図に陥っているのは、このように、両者が互いに相手を主体である自分との関係においてノーマルでないものと定義し、差異化しているからである。この物語の現実世界は、魔法界こそノーマルと見る視点から描かれ、さげすむべきもの、不便なもの、妙な発明品に満ちているものという評価を受けている。エレイン・オストリーが述べているように、「魔法使いは例外なくマグルを軽蔑しており、魔法使いであるとは、すなわちエリートの世界の一員であるということに他ならない。ハグリッドはのろのろ走る地下鉄に乗ることを嫌がり、マグルはどうして魔法なしでやっていけるのかと理解に苦しむ¹⁷⁾」のである。現実の世界と地続きのどこかにある魔法学校を主な舞台としているという点では、『ハリー・ポッター』シリーズは現実世界の日常の暮らしの中に魔法の要素が紛れ込む作品のひとつであり、メアリ・ポピンズ型ファンタジーの一種だと分類できる。しかし、『メアリ・ポピンズ』が異世界出身の人物が体験させてくれる魔法に驚嘆する人間の子どもたちを中心としているのとは違って、ここでは逆に異世界の魔法使いたちのほうが主たる登場人物である。軸足は完全に魔法界の側にある。このため、『メアリ・ポピンズ』のように現実世界の中に異世界が紛れ込むのではなく、むしろ異世界の中に折にふれて現実世界が紛れ込むという設定になっており、魔法使いの言うマグルの世界、つまり現実世界のほうがあたかも異世界であるかのように扱われている。したがって、物語世界の中で主体の役割を背負うのは魔法界のほうとなる。魔法界側の視点からマグルの世界が定義され、差異化されることになり、必然的に、魔法界のほうがノーマルのレッテルを手にする。マグル界をノーマルだと見なす考えは傍流となり、結果として、ノーマルで善を行なう魔法界、すなわちわれわれの側と、ノーマルではなく善を行なわな

い、言いかえれば悪いマグル界、すなわち彼らの側という構図が浮かび上がることになる。

興味深いことに、魔法界とマグル界の対立の構図と相似形のもので、魔法界そのものの中にも見いだせる。すでに指摘したように、『ハリー・ポッター』シリーズは基本的に、善い魔法使いと悪い魔法使いが対立する物語であり、善の側から見れば、悪い魔法使いの側は“the other side¹⁸⁾”なのである。善い魔法使いの筆頭はハリーの所属するホグワーツ魔法魔術学校の校長ダンブルドアであり、悪の代表は闇の魔法使いヴォルデモート卿である。両者のまわりには、それぞれの味方となる魔法使いや魔法界に暮らす存在が配置されている。ダンブルドアが信頼するのは、ホグワーツの副校長のマクゴネガルであり、森番のハグリッドであり、ハリーの親友ロンの両親ウィーズリー夫妻である。一方、明らかにハリーにとって敵役を演じるのは、ホグワーツでの同級生ドラコ・マルフォイと、その父親のルシウス・マルフォイである。そして、彼らに加えて、各巻ごとにひとりないし複数の魔法使いもしくは魔法界の生き物の善悪の所属が判明するという仕掛けになっている。例えば第1巻では、気が弱いどもりやの教師にしか見えなかったクィレルが、ターバンの下に自分に取りついたヴォルデモートを隠していたと判明する。第2巻では、50年前にホグワーツに在籍していたトム・リドルという生徒が卒業後にヴォルデモート卿になったこと、そして自分の日記帳を利用してロンの妹ジニーをあやつり、ハリーを破滅させようとしていたことが明らかになる。第3巻では、ハリーの両親の死の原因を作ったと信じられていたシリウス・ブラックが、実はハリーの名付け親で味方であり、一方、ロンの飼っているネズミがヴォルデモート卿の手下でハリーの両親を裏切ったピーター・ペティグルーの変身した姿だと分かる。第4巻ではハリーの味方のマッド・アイ・ムーディと思われていた人物が、実はヴォルデモート卿の側の魔法使いの変身した姿だったと分かる。第5巻では、シリウス・ブラックに忠実に仕えているはずの屋敷しもべ妖精クリーチャーが、実は悪の側の魔法使いルシウス・マルフォイの妻ナルシッサに情報をもらしていたと判明する。このような中、主人公のハリー自身は、ヴォルデモート卿によってつけられた額の傷が痛むことから、自分が彼に取りつかれているのではないかと、つまり善の側に属しているつもりが実は悪の側なのではないかと恐れることになる。しかし、各巻が終わるたびにハリーの心配は杞憂であったと判明する。ハリーは結局善の側であり、ヴォルデモート卿の最大の敵であると示される。

アマンダ・コクレルは、ハリーやヴォルデモート、魔法薬の教師セヴルス・スネ

イブ、魔法界の監獄アズカバンの看守で人々の希望や幸福を吸い取ってしまうというデイメンターらの中に、善悪の二重性を見出しているが¹⁹⁾、物語の中でそうした二重性自体が意義あることとして保持されたり推奨されたりするわけではない²⁰⁾。最終的にはすべてがダンブルドアの側、すなわち善と、ヴォルデモートの側、すなわち悪のいずれかに色分けされていき、善の側を守り悪の側を退けることこそ、各巻でハリーが何の疑問も持たずに正しいと考える行動である。『ハリー・ポッター』シリーズでは、このように、どんな切り口から眺めてみても、究極的には善と悪を区別すること、言いかえれば、われわれの側と彼らの側を区別する、すなわち自己と他者を区別することが物語を進める牽引力となっている。

Ⅲ

『ライラの冒険』においても、ハリー・ポッターの物語においてのように、善と悪の戦いが繰り広げられるが、この作品を印象的なものにしていく大きな要素のひとつは、数え切れないほどたくさんの世界が存在しているという設定ではないだろうか。もちろん、世界が複数存在するという考え自体はプルマン独自のものではない。例えば、C・S・ルイスによる『ナルニア国物語』の『魔術師のおい』でも、『ライラの冒険』に出てくるチッタガーゼのような「世界と世界のあいだの森²¹⁾」が登場し、主人公の男女の子どもたちはそこを拠点に複数の世界を行き来しようとする²²⁾。しかし、プルマンの創造した複数の世界は非常に独特な関係のもとにあり、これが『ライラの冒険』を非常にスケールの大きな作品にしている要因のひとつと言える。第1巻目の『黄金の羅針盤』で、アスリエル卿は世界のありようについて、ライラに次のように説明する。

ここで、あの世界とほかのあらゆる宇宙が、可能性の結果として生じたんだ。コイン投げを例に挙げてみよう。コインを投げると表か裏が出るが、落ちるまではどっちになるかは分からない。もし表が出たら、裏が出る可能性が消えたということだ。その瞬間までは、ふたつの可能性は等しかったんだ。

だがもうひとつの世界では、裏が出る。そうなるとき、世界がふたつに分裂するんだ。コイン投げの例を使っているのは分かりやすくするために、実際には、こうした可能性の消失は素粒子のレベルで起こるんだが、起こり方はまったく同じだ。ある瞬間、いくつかのことが可能に見えるが、次の瞬間、ひとつだけが起こって、

ほかのことは存在しなくなる。ただし、別の世界がぱっと生じて、そこではほかのことが起こったんだ²³⁾。

つまり、何十億という世界が乱立しているように思われるが、そもそもの最初は世界がひとつ存在していて、その世界に何かが起こるたびごとに、ある可能性が実現した世界と、別の可能性が実現した世界に、分裂していったというのである²⁴⁾。つまり、ひとつの選択がなされるというのは、他の選択の排除や消滅を意味しない。ある世界においてひとつの選択が実現するということは、その選択が実現していないという点のみがその世界と異なる世界が新たに出現するということである。つまり、ある世界で何かを選択されるたびに、その世界の分身が誕生するのである。『ハリー・ポッター』における現実世界と異世界が自己と他者の関係にあるのに対し、プルマンの描く現実世界と異世界は、自己と分身の関係にあると言える²⁵⁾。

自らの分身つまりドッベルゲンガーに出会うことを死の予兆ととらえる伝承があるが、『ライラの冒険』では、人々はあるとき、生まれるのと同時に一緒に世界にやってきたという自らの「死」の存在に気づき、死者の国へのボートに乗るため棧橋へと導かれる。「死」は、人がある世界に生まれ出ることを選択した瞬間に、その世界を立ち去る可能性として出現したその人の分身と考えられる。ドッベルゲンガーの伝承にあるように、自分の分身と出会うことによって、人々は死者の国へと向かうことになる。そして、『ライラの冒険』では、人だけでなく、何十億と存在する世界もまた、自己と分身としてこの伝承を反映している。第2巻の『神秘の短剣』から登場する少年ウィルは、こちらの世界からあちらの世界へと縦横無尽に行き来することを可能にしてくれる短剣を手に入れる。しかし、その短剣が世界と世界をつなぐ窓を切り開くたびに、ダイモンやダストを食らうスペクターが誕生し、その窓からダストが奈落へと流出していくということが、物語の結末で明らかになる。ダイモンとは、クレア・スクワイアズの説明を借りれば、「魂を擬人化（あるいはむしろ動物化）したものである」が、「人間もダイモンも物理的な姿かたちとそれ自体の意識を持っているのだから、両者の違いは確かに肉体と魂の違いではない²⁶⁾」という特異な存在で、これが失われると、人は意識を失った肉体だけの存在となり、廃人になってしまう。ダストとは、世界によってスラフ、シャドウ、暗黒物質と呼び名は違うものの、どの世界においても意識ある生き物すべてを生かしているこの上なく重要なものである。ダイモンを守りダストを失わないことが『ライラの冒険』では何より大切なこととなるが、そのためには、世界と世界をつなぐ窓

は存在してはならない。別世界への出入りを可能にしてくれる短剣を魅力的なもの
と見なす登場人物が多い中で、ライラの最大の味方のひとり、鎧をつけたクマの
王であるイオレク・バーニソンだけは、短剣の遣い手であるウィルに、「お前が分
かっていないのは、その短剣がひとりでにやっつてのけることだ。お前はいいことを
するつもりかもしれないが、短剣にも意図があるんだ²⁷⁾」と語り、短剣に対する不
安を露わにする。そして、その不安は的中していたとやがて判明することになる。
短剣で世界をつなぐ窓を切り開き、ある選択がなされた世界とその選択がなされな
かった世界を同時に目の当たりにするのは許されない行為なのである。ある世界が
現前するときには、その分身は不在でなければならない。ある世界が分身である別
の世界に対して開かれる、いわば自らの分身に出会うというのは、その世界にとっ
てダストやダイモンを失うことによる死の訪れを意味している。

この物語では、ある世界で生まれた者は、その世界を離れて別の世界で生きつづ
けることができないが、これもまた、何十億という世界が互いに自己と分身の関係
にあるからこそ起こると考えられる。ある世界に生まれるとは、その世界の一部で
あることに他ならない。ライラはライラの世界の、ウィルはウィルの世界の一部で
あり、ふたりの世界は他の何十億という世界の例にもれず、自己と分身の関係にあ
る。ふたりの世界が互いに開かれてはならない関係にある以上、ふたりは本来は出
会うはずのない存在であり、ふたりが出会うというのは異常事態ということになる。
三部作の最後で、ふたりの世界の関係の理想のあり方が提示される。

ザファニアがセラフィナ・ペカーラに言ったことによれば、すべての窓が閉じられ
ると、世界はすべてたがいに適切な関係に戻るだろう。そして、ライラのオックス
フォードとウィルのオックスフォードは、二枚のフィルムの透き通った画像がどん
どん近づいて溶けあってしまうように、ふたたび重なりあうだろう。ただし、ふた
つは絶対に触れあうことはない²⁸⁾。

つまり、この物語の現実世界と異世界は、別個に存在し、決して一体のものとはな
らない。したがって、ライラとウィルが同じ世界で暮らすというのは不可能なので
ある。しかし、同時に、現実世界と異世界は、本来は限りなく近い位置関係にある
とされる。愛し合いながらも別れを余儀なくされるライラとウィルは、ここに一筋
の希望を託すことになる。ふたりは、毎年同じ日の同じ時間にそれぞれの世界の
オックスフォードにある植物園のベンチに座りに来ることを約束しあう。実際に触

れ合うことは決してできないが、それでもそれは、溶けあってしまうほどそばにいることに他ならないからである。それぞれ自分の世界に「神の王国」ならぬ「至福の共和国」を築くという、互いに重なりあう目標を持つに至っているふたりは、結局この約束をすることで、自分たちが属している世界と同じく、自分たちもまた分身の関係であることを受け入れているのである。

IV

子どもの文学にとって、物語中の出来事を経験することによる主人公の精神的な成長というのは非常に重要な要素であるが、ハリーとライラの成長のありようの違いは、ここまで見てきたようなそれぞれの作品の物語世界のありようの違いと重なっている。ハリーについて考える場合、このシリーズは思春期直前期の子どもの内面を忠実に表象しているというリサ・ダムーアの論²⁹⁾や、物語の中で学習による知識の獲得が重要視されているというリサ・ホプキンズの指摘³⁰⁾には説得力がある。ハリーは巻を追うごとに、その年齢の少年にふさわしく発達している様子を示し、また、魔法学校での活動を通じていろいろな技や知識を身につけている。一方、精神的な成長という点では、彼は経験から何かを吸収して成長を遂げるというタイプの登場人物だとは言いがたい。例えば、エレイン・オストリーは、「ハリーは少しは成長するが、本質的にはフェアリー・テイルの主人公のようにほとんど変化をしない登場人物である³¹⁾」と論じている。確かにハリーはどの巻においても、思慮に欠け、激情に動かされやすいところがあり、思い込みによって行動しがちである³²⁾。ヴォルデモートが次第に力を拡大しているにもかかわらず、ハリーはつねに最終的にはヴォルデモートの魔の手を逃れることができるが、これは彼が前の巻よりも賢明になったから可能になったのだとは言いがたい。ハリーの機転や本能的な判断が彼を成功に導いているのは確かだが、それらは以前の巻での出来事を通して少しずつ得られていったものというよりは、むしろ最初からハリーという少年に備わっていたものとして提示されている。このように、ハリーのありようをいわゆる子どもの文学における成長の一例と安易にとらえてしまうことには疑問を呈さざるを得ないが、しかし、そうではあっても、彼がヴォルデモート卿について知ることは自己を知ることにつながっている。他者を意識することによって、自己を認識することが可能になるのであり、ハリーは悪の代表と言うべきヴォルデモートと自分の差異を、ダンブルドアをはじめとするまわりの人々の言葉によって確認することになる。

そして、ヴォルデモートと対決しなければならないという自分の使命に、より強い思い入れを抱くに至るのである。

一方、ライラの物語では、『ハリー・ポッター』シリーズにおいてのように自己と他者を差異化して対立することから何らかの認識が生まれるというわけではない。ライラの成長はむしろ、試行錯誤をへて自己と分身の理想の関係を追求することになった結果、実現する。教会の頂点に立つオーソリティを減ぼそうというアスリエル卿の大胆な戦いとは、善の側、すなわち、すべての生き物の生を支えるというダストを大切に思い、無知よりも経験を是とし、知恵を身につけ意識を持つことを肯定する者と、悪の側、すなわち、生き物が意識を持ち知識を得て、権力のありように疑問を抱く可能性を持つことを忌み嫌う者との戦いである³³。この戦いに巻き込まれていく中で、『ハリー・ポッター』シリーズの場合と同じく、『ライラの冒険』の登場人物は、たとえいろいろな紆余曲折があろうとも、キム・ドルギンが指摘しているように、結局は善か悪のどちらかにふり分けられることになる³⁴。しかし、『ハリー・ポッター』の場合、どちらが善でどちらが悪かは自明のことであるが、『ライラの冒険』の場合、ライラは何が善で何が悪であるかの認識を簡単に持てるわけではない。自分が何をすべきかライラが試行錯誤する過程を物語は追っていくことになる。意識を持つことの大切さが強調される善悪の戦いに巻き込まれているにもかかわらず、ライラは自分の行動の意味や帰結を意識できないまま暗中模索しつづける。彼女がはじめてきちんと意識を持って何かを行なうのは、戦いのあと、ウィルと同じ世界に暮らせなくなったとしても、ダストの流出を防ぐために世界と世界のあいだに開かれた窓を閉じなくてはならないと決意するときである。ライラが徐々に成長しているということは、大人にしか見えないスペクターがぼんやりと見えるようになってきたことなどで示されているが、窓を閉じるという決意ののち、彼女のダイモンがもう姿を変えなくなるという決定的な出来事が起こる。大人のダイモンは姿を変えないことから、このとき彼女が子ども時代を抜け出し、大人への一歩を踏み出したことが明らかとなる。

物語中の世界のありようを自己と他者の関係に重ねて描き出しているハリー・ポッターの物語では、物語内の出来事もつねに自己と他者の区別に向かう。こうして物語は、対立という安定した構造のうえで展開し、ハリーの究極的な目標がぶれるということは起こらない。一方、ライラは自分の使命を知らないまま、目の前の出来事に取り組むことによって進んでいくが、悩んだり迷ったり、後悔したり新たな決意を固めたりといった試行錯誤のその過程は、自己と分身の関係にあるライラ

の物語の世界が、世界と世界のあいだに開かれてしまった無数の窓によって混迷する過程と重なりあう。そして、ライラの目標が本来の自分の世界に至福の共和国を築くことに定まったとき、現実世界と異世界の関係も、短剣によって開かれた無数の窓を持つ状態から脱して、一体とはならないが限りなく寄り添いあうという理想の状態に落ち着くことになる。世界と世界の関係が入り乱れているとき、主人公ライラの冒険もまた一貫し安定した方向性を持つことがない。そして、世界と世界の関係が安定するとき、ライラの冒険の目標もぶれなくなるのである。

このように、ハリー・ポッターの物語とライラの物語の違いを求めると、世界のありようが終始一貫自己と他者の関係に重ねて描かれ、そこで起こる出来事もたえず自己と他者の区別に向かうという物語なのか、あるいは無秩序に陥った世界のありようが自己とその分身として秩序を取り戻していく中で、登場人物のありようも無秩序の状態から、分身を得た秩序ある状態へと変化していく物語なのか、というところに行き着く。単純な二項対立の持つ安定感に全面的に依拠して、分かりやすさを至上命題とするかのような『ハリー・ポッター』シリーズと、やはり善悪の二項対立を基盤としているものの、そこに過剰なまでの複雑さを付与し、最終的には新しいありようを目指すことになるという『ライラの冒険』三部作では、どちらにおいても対立する二項のあいだに和解は成立しない。和解という方向性を探るのではなく、和解し得ないという状態を出発点とし、その状態で可能性として残されている道を描き出しているのである。これは混迷する今日の世界情勢を思い浮かべるとき非常に示唆的であり、ハリーとライラの冒険は、子どものための文学、子どものためのファンタジーもまた、かつてチャールズ・キングズリーの『水の子』がそうであったように、非常に政治性を持ちうるものなのだということを、大いに物語っていると言えるだろう。ハリーの物語とライラの物語の違いは、和解なき世界に残された道として提示されるものの違いなのである。そして、いずれにおいても、物語の展開のありようは、物語中の現実世界と異世界の関係と密接なつながりを持っており、両者の違いを生み出すひとつの大きな要因は、異世界の作り方にあると言える。この二作品の例は、ファンタジーにとって異世界とは、読者の興味を引きつける目新しい場所や空間であるというだけでなく、そのありようが物語の展開と密接なつながりを持ち、ときにはそれを規定するほどの大きな意味を持つ可能性を秘めたものだというを示してくれるのである。

* 本稿は、テキスト研究会第5回大会におけるシンポジウム「ハリー・ポッターほ

か——ファンタジー文学の魅力」(2005年8月26日、於青山学院大学)での発表原稿に、大幅な加筆修正を加えたものである。

註

- 1) “The Big Read: Top 21,” *BBC. co. uk*, 3 March 2006, BBC, 3 March 2006 <<http://www.bbc.co.uk/arts/bigread/vote/>>.
- 2) 例えば、「ニューヨーク・タイムズ」紙は、第6巻発売日の2005年7月16日前後に、Edward Wyatt, “Harry Potter and the Half-Crazed Summer Camper,” *New York Times* 14 July 2005, late ed.: E1+; Julie Salamon, “In Love with Harry, Over and Over Again,” *New York Times* 15 July 2005, late ed.: E27+; Michiko Kakutani, “Harry Potter Works His Magic Again in a Far Darker Tale,” *New York Times* 16 July 2005, late ed.: B7+; Edward Wyatt, “Young Fans of Wizard Still under His Spell,” *New York Times* 16 July 2005, late ed.: B7+; Edward Wyatt, “Harry Potter Is Bigger Than Ever, It Would Seem, and His Fans Are, Too,” *New York Times* 17 July 2005, late ed., sec. 1: 26; Doreen Carvajal, “If Harry Potter Vanishes, What’s Next for British Publisher?” *New York Times* 18 July 2005, late ed.: C4; Edward Wyatt, “Potter Book Sets Record in First Day,” *New York Times* 18 July 2005, late ed.: E3など、連日『ハリー・ポッターと謎のプリンス』発売に関連するさまざまな記事を掲載している。
- 3) Philip Nel, *J. K. Rowling’s Harry Potter Novels: A Reader’s Guide*, Continuum Contemporaries (New York and London: Continuum, 2001) 36.
- 4) 『ハリー・ポッター』シリーズと『ライラの冒険』三部作の比較については、Colin Manlove, *From Alice to Harry Potter: Children’s Fantasy in England* (Christchurch, New Zealand: Cybereditions, 2003) 190–191の論も興味深い。マンラヴはこの両者を「遠心性」と「求心性」をキーワードに比較しており、『ライラの冒険』の基盤は世界のありようを発見することであって、そこではかなたの世界を目指して絶えず外へ向かっていくことになるが、『ハリー・ポッター』においては逆に現実世界の中に存在するより小さな世界へと入り込んでいくことになると指摘している。登場人物に関しても、ライラは幸福を求めてはるばる旅に出なくてはならないが、ハリーについては、すべてが彼に向かってやってくることになるのだと論じている。
- 5) J. R. R. Tolkien, “On Fairy-Stories,” *Tree and Leaf* (1964; London: HarperCollins, 2001) 37.
- 6) Tolkien 48.

7) Tolkien 49.

8) 井辻朱美は「場所」や「空間」をキーワードにさまざまなファンタジー作品を概観しているが、このトルキーンファンタジー論に関連して、以下のように述べている。

こうしてながめてみて、つくづく再認するのは、ファンタジーとは「外に脱けでる」運動そのものではないかということだ。わたしのせまくるしい心理から脱けて、建物や場所や街を見直し、その中にある身体としてのわたしを発見する。さらに住み慣れた日常から脱けだし、わたしの日常そのものを外からとらえなおす。TVのニュース番組や雑誌の記事やなにやかやが作りあげる「これがそのものであるかのような」世界から脱けだし、ものに意味を付与する源、命名する源としてのわたしを発見し、世界を作りかえる。トルキーンはファンタジーの三つの効用を「逃避」「回復」「慰め」と呼んだが、これらはまさに「外に脱けでる」ことがもたらす力である。ファンタジーは神話や宗教的な世界観を語ることがあるが、その内容によってではなく、この形式が本来的にもつ「枠の外に脱けでる」力ゆえに、智慧の文学、救済の文学と呼ばれるべきなのではないだろうか。(井辻朱美『ファンタジーの魔法空間』岩波書店、2002年、269頁)

9) Rosemary Jackson, *Fantasy: The Literature of Subversion, New Accents* (1981; London and New York: Routledge, 1995) 2.

10) Richard Matthews, *Fantasy: The Liberation of Imagination*, Studies in Literary Themes and Genres No. 16 (New York: Twayne, 1997) 1. なお、ファンタジー文学に関しては、ほかにTzvetan Todorov, *The Fantastic: A Structural Approach to a Literary Genre*, trans. Richard Howard, with a Forward by Robert Scholes (Ithaca, New York: Cornell UP, 1975); C. N. Manlove, *Modern Fantasy: Five Studies* (Cambridge: Cambridge UP, 1975) なども参照した。

11) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Half-Blood Prince* (London: Bloomsbury, 2005) 15.

12) J. K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (London: Bloomsbury, 1997) 7.

13) Rowling, *Philosopher's Stone* 43.

14) Rowling, *Philosopher's Stone* 44.

15) Rowling, *Philosopher's Stone* 79.

16) Rowling, *Philosopher's Stone* 53.

17) Elaine Ostry, "Accepting Mudbloods: The Ambivalent Social Vision of J. K. Rowling's Fairy Tales," *Reading Harry Potter: Critical Essays*, ed. Giselle Liza Anatol (Westport, Connecticut and London: Praeger, 2003) 93.

- 18) Rowling, *Half-Blood Prince* 24.
- 19) Amanda Cockrell, "Harry Potter and the Secret Password: Finding Our Way in the Magical Genre," *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*, ed. Lana A. Whited (Columbia and London: U of Missouri P, 2004) 15-26.
- 20) コクレルの指摘を待つまでもなく、白黒をはっきりつけることが至上命題のようなハリー・ポッターの物語に、あえて白とも黒とも言えない部分を見出そうとするならば、確かにスネイプが浮かび上がってくる。彼は、最初からハリーに対する憎しみを隠さず、授業ではハリーに辛い点ばかりつけ、口を開けば嫌みを連発する。到底ハリーの味方とは思えない。あたかも黒であるかのようにスネイプが見えるために、他の本当の黒の人物の存在がかすんでしまうことになる。しかし、彼は限りなく黒に近く見えるものの、第5巻まではつねに最終的には白と判明しつづける。彼は、単純明快に陥りがちな善悪の対立の物語が複雑に見えるようかきまわす役割を担っていると言える。第6巻の終わりで、彼はダンブルドアを殺して逃亡することになるが、はたしてこれで彼を悪の側に分類してよいのか、スネイプはやはりダンブルドアの信頼に足る人物であり、ダンブルドア殺しも悪の側を油断させる計略なのではないかと疑えなくもない。スネイプもしくは他の何者かが善悪の対立の構図に揺さぶりをかけ、善でも悪でもある、あるいは善でも悪でもないという第三のありようを『ハリー・ポッター』シリーズの世界に持ち込むかどうかについては、未発表の第7巻が待たれるところである。
- 21) C. S. Lewis, *The Magician's Nephew, The Chronicles of Narnia* (1955; London: Collins, 1995) 37.
- 22) 興味深いことに、プルマンは『ナルニア国物語』は有害だと公然と非難している。この発言にはバートン・ハトランやカレン・パトリシア・スミスなど多くの批評家が注目しているが、クレア・スクワイアズのまとめによれば、プルマンが最も問題視しているのは、『ナルニア』におけるキリスト教のアレゴリー、および『ナルニア』において思春期が非常に否定的に扱われていることである。Burton Hatlen, "Pullman's *His Dark Materials*, a Challenge to the Fantasies of J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis, with an Epilogue on Pullman's Neo-Romantic Reading of *Paradise Lost*," *His Dark Materials Illuminated: Critical Essays on Philip Pullman's Trilogy*, ed. Millicent Lenz with Carole Scott (Detroit: Wayne State UP, 2005) 82-83; Karen Patricia Smith, "Tradition, Transformation, and the Bold Emergence: Fantastic Legacy and Pullman's *His Dark Materials*," Lenz with Scott 149; Claire Squires, *Philip Pullman's His Dark Materials Trilogy: A*

- Reader's Guide*, Continuum Contemporaries (New York and London: Continuum, 2004) 17-18.
- 23) Philip Pullman, *Northern Lights* (London: Scholastic, 1995) 376-377.
- 24) このような世界のありようの基盤には、量子力学のシュレーディンガーの猫やエヴェレットの多世界解釈といった考え方がある。プルマンは、物語のある部分を納得することができれば読者は残りの部分も受け入れやすくなるだろうと考え、こうした世界を創造するにあたって、並行世界に関する本を読んだり科学者の講義を受けたりしたと明かしている。Philip Pullman, "Science: A Very Short Introduction," Introduction, *The Science of Philip Pullman's His Dark Materials*, by Mary and John Gribbin (London: Hodder Children's Books, 2003) xvii-xix.
- 25) 他者と分身の概念については、G. W. F. Hegel, *Phenomenology of Spirit*, trans. A. V. Miller, with analysis of the text and foreword by J. N. Findlay (Oxford: Oxford UP, 1977); Jacques Lacan, *The Four Fundamental Concepts of Psycho-Analysis*, ed. Jacques-Alain Miller, trans. Alan Sheridan (Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1979); Lacan, *Écrits: The First Complete Edition in English*, trans. Bruce Fink in collaboration with Héloïse Fink and Russell Grigg (New York and London: W. W. Norton, 2006); Emmanuel Levinas, *Time and the Other*, trans. Richard A. Cohen (Pittsburgh, PA: Duquesne UP, 1987); Levinas, *Alterity and Transcendence*, trans. Michael B. Smith (New York: Columbia UP, 1999); Levinas, *Humanism of the Other*, trans. Nidra Poller, introd. Richard A. Cohen (Urbana and Chicago: U of Illinois P, 2003); Otto Rank, *The Double: A Psychoanalytic Study*, trans., ed. and introd. Harry Tucker, Jr. (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1971); Paul Coates, *The Double and the Other: Identity as Ideology in Post-Romantic Fiction* (London: Macmillan, 1988) の議論を参考にした。
- 26) Squires 26. スクワイアズヤリサ・ホプキンズ、ヒュー・レイマント＝ピカードは、ダイモンを『ライラの冒険』三部作の最もすばらしい特徴のひとつと賞賛している。Squires 24; Lisa Hopkins, "Dyads or Triads?: *His Dark Materials* and the Structure of the Human," Lenz with Scott 49; Hugh Rayment-Pickard, *The Devil's Account: Philip Pullman and Christianity* (London: Darton, Longman and Todd, 2004) 57.
- 27) Philip Pullman, *The Amber Spyglass* (London: Scholastic, 2000) 190.
- 28) Pullman, *Amber Spyglass* 532-533.
- 29) Lisa Damour, "Harry Potter and the Magical Looking Glass: Reading the Secret Life of the Preadolescent," *Anatol* 15-24.

- 30) Lisa Hopkins, “Harry Potter and the Acquisition of Knowledge,” *Anatol* 25–34. なお、ホプキンスはこの論文の中で、ライラが真理計を読む力を学ばなければならなくなる点を、ハリーやその級友が魔法を学ばなければならない点に重ね合わせて、『ハリー・ポッター』シリーズと『ライラの冒険』三部作を興味深く比較している。
- 31) Ostry 97.
- 32) 例えば、16歳になっている第6巻では、ハリーは敵とも味方ともさだかでない「混血のプリンス」の書き込みにしたがいつづけ、ハーマイオニの反対に耳を貸そうとしない。第2巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』でトム・リドルの日記帳に翻弄された12歳のときの教訓を生かそうとしないのである。
- 33) したがって、真理計を労せずして読める力を物語の結末でライラが失うのは必然と言える。無意識であるよりも意識を持つことを高く評価する側が勝利を収めるという物語の中で、大人へと成長していくライラに求められるのは、本能的に真理計のメッセージを受け取る能力ではなく、学習によって意識的に真理計の動きを解釈する力である。シェリー・キングの表現を借りれば、「子どもの読み手」ではなく「学者の読み手」になることが、必然的に要求されるのである。Shelley King, “‘Without Lyra We Would Understand Neither the New nor the Old Testament’: Exegesis, Allegory, and Reading *The Golden Compass*,” Lenz with Scott 106–124を参照。
- 34) ドルギンによれば、ライラとウィルは「世界を二元論の視点で見て」おり、「ふたりの考えでは、敵意に満ちたハービーでさえも、ウィルが死者の国からの出口を切り開いて以後は奇跡的な変身を遂げ、純粋な美德を实践することになる。つまり、良くもあり同時に悪くもあると見られることはありえない」のである。Kim Dolgin, “Coming of Age in Svalbard, and Beyond,” *Navigating the Golden Compass: Religion, Science and Dæmonology in His Dark Materials*, ed. Glenn Yeffeth (Dallas, Texas: Benbella Books, 2005) 73.